

山上憶良の死生観

小谷俊博

序

万葉歌人の一人である山上憶良(六六〇?—七三三?)は、生きる苦しみについて歌った多くの作品を残した。また、生の様々な諸相に苦を見出してきた憶良は、生の先にある死について言及する作品も残してきた。本論に入る前に、まず憶良は具体的にどのような形で死を扱っていたのかを確認されなければならぬだろう。

まず、第三者に成り代わって歌う作品がある。これに当たるものとして、「日本挽歌」「男子名は古日に恋ふる歌」「熊凝のためにその志を述ぶる歌に敬和する六首」が挙げられる。前者二作品は、妻あるいは子に死なれた人の立場に成り代わって歌ったものである。後者は、死を目前にした熊凝に成り代わって、残されることになる両親への思いを歌ったものである。

次に、自分じしんに訪れる死について思いをめぐらせた以下の作品が挙げられる。すなわち、「沈痾自哀文」「俗道の仮合即離し、去りやすく留みかたきことを悲嘆しぶる詩」(以下、「俗

道悲嘆詩」と呼ぶ)である。これらの作品では、死の受容が主題となる。

最後に、死を主題化したとまでは言えないものの、自己の死について言及し、またそれによって残される人への思いを歌い上げた作品として、「老身に病を重ね、経年辛苦し、児等を思ふに及る歌」(以下「児等を思ふに及る歌」と呼ぶ)を挙げることが出来る。

本論文は、憶良の死生観を探求するものであるが、まずは以下の二点に注目する。一点目は、憶良が生死をいかに意味づけていたのかという点、二点目は、憶良はいかにして自らの死を受容したのか、あるいはしえなかつたのか、という点である。以上の二点を基軸として、先に挙げた作品のうち、後者二作品を検討していく。そして、これらの作品の内的連関を検討した後、憶良の死生観、そして憶良思想とはいかなるものであったのかを探求していく。

一、死に対する抵抗

沈痾自哀文

山上憶良作

ひそかにおもひみるに、朝夕山野に佃食する者すらに、なほ災害なくして世を渡ること得、常に戸箭を執り、六齋を避けず、儲へる禽獸の、大きなと小さきと、孕むと孕まぬとを論はず、ことごとく殺し食ふ、これをもちて業とする者をいふぞ、昼夜河海に釣漁する者すらに、なほ慶福ありて俗を経ることを全くす。漁夫・潜水、おのおの勤むるところあり、男は手に竹竿を把りて、よく波浪の上に釣り、女は腰に繫籠を帯びて、潜きて深潭の底に採る者をいふぞ、いはむや、我れ胎生より今日までに、自ら修善の志あり、かつて作悪の心なし。諸悪莫作、諸善奉行の教へを聞くことをいふぞ、このゆゑに、三宝を礼拝し、日として勤めずといふことなし、毎日に誦経し、発露懺悔するぞ、百神を敬重し、夜として欠くことありといふことなし。天地の諸神等を敬拝することをいふぞ、ああ嫉しきかも、我れ何の罪を犯せばか、この重き疾に遭へる。いまだ、過去に造れる罪か、もしは現前に犯せる過なるかを知らず、罪過を犯すことなくは、何ぞこの病を獲むといふ。

初め病に沈みしより已来、年月やくやくに多し。十余年を経たることをいふ、是時年七十有四、鬢髮斑白にして、筋力羸なり。ただに年老いたるのみにあらず、またこの病を加ふ。諺に曰はく、「痛き瘡は塩を灌き、短き材は端を截る」といふは、この謂ひなり。四支動かず、百節みな疼み、身

体はなほだ重きこと、鈎石を負へるがごとし。二十四銖を一兩となし、十六兩を一斤となし、三十斤を一鈎となし、四鈎を一石となす。合せて二百二十斤なり、布に懸かりて立たむと欲へば、折翼の鳥のごとし、杖に倚りて歩まむとすれば、跛足の驢のごとし。

吾れ、身はすでに俗を穿ち、心もまた塵に累ふをもちて、禍の伏すところ、崇の隠るるところを知らむと欲ひ、龜卜の門、巫祝の室、往きて問はずといふことなし。もしは実にもあれ、もしは妄にもあれ、その教ふるところに随ひて、幣帛を奉り、祈禱らずといふことなし。しかれどもいよ増苦あり、かつて減差なし。我れ聞くに、「前の代に、多く良医ありて、蒼生の病患を救療す。楡柎・扁鵲・華佗、秦の和・緩・葛稚川・陶隱居・張仲景らのごとくに至りては、みな世に在りける良医にして、除愈さずといふことなし」と。扁鵲、姓は秦、字は越人、勃海郡の人なり。胸を割き心を探り、易へて置き、投るるに神薬をもちてすれば、すなはち痛めて平のごときぞ。華佗、字は元化、沛國の譙の人なり。もし病の結積沈重して内にある者あれば、腸を剖りて病を取り、縫復して膏を摩る、四五日にして差ゆ。件の医を追ひ望むとも、あへて及ぶところにあらず。もし聖医神薬に逢はずば、仰ぎて願はくは、五藏を割り削ぎ、百病を抄り探り、膏膏の隙処に尋ね達り、膏は兩なり、心の下を膏となす。これを攻むれども可からず、これに達せども及ばず、薬も至らぬぞ。一豎の逃れ匿れたるを頭はさむと欲ふ。晋の景公疾めるときに、秦の医、緩視て還るは、鬼に殺

さゆといふべしといふことをいふぞ
命根すでに尽き、その天年を終ふるすらに、なほ哀しびとなす。聖人賢者、一切の含靈、誰れかこの道を免れめや、いかにいはむや、生録いまだ半ばにもあらねば、鬼に枉殺せらえ、顔色壯年なるに、病に横困せらゆる者はや。世にある大患の、いづれかこれより甚だしからむ。志愴記に云はく、「広平の前の大守北海の徐玄方が女、年十八歳にして死ぬ。その靈、馮馬子に謂ひて「我が生録を案ふるに、寿八十余歳に當る。今妖鬼に枉殺せられて、すでに四年を経たり」といふ。ここに馮馬子に遇ひて、すなはちさらに活くこと得たり」といふはこれなり。内教には、「臆浮州の人は寿百二十歳なり」といふ。隨みて案ふるに、この数かならずしもこれに過ぐること得ずといふにはあらず。故に、寿延経には「比丘あり、名を難達といふ。命終らむとする時に臨み、仏に詣てて寿を請ひ、すなはち十八年を延べたり」といふ。ただ普く為むる者は天地と相華る。その寿夭は業報の招くところにして、その修き短きに随ひて半ばとなるぞ。いまだこの算にも盈たずして、たちまちに死去す。故に「いまだ半ばにもあらず」といふぞ。任徴君曰はく、「病は口より入る、故に君子はその飲食を節す」といふ。これによりて言へば、人の疾病に遇ふは、かならずしも妖鬼にあらず。それ、医方諸家の広説、飲食禁忌の厚訓、知易行難の純情の三つは、目に盈ち耳に滿つこと、由来久しきぞ。抱朴子には「人はただそのまさに死なむとする日を知らず、故に憂へぬのみ。もしまことに羽翮して期を延ぶること得べきを知らば、かならずこれをなさむ」といふ。ここをもちて觀れば、すなはち知りぬ、我が病はけだし飲食の招くところにして、自ら治むること能はぬものかといふことを。

帛公略説には「伏して思ひ自ら励むに、この長生をもちてす。生は貪るべし、死は畏るべし」といふ。天地の大徳を生といふ。故に死にたる人は生ける鼠にだに及かず。王侯なりといへども、一日氣を絶たば、積める金山のごとくもありとも、誰れか富めりとなさむ、威き勢海のごとくもありとも、誰れか貴しとなさむ。遊仙窟には、「九泉の下の人は、一錢にだに直せず」といふ。孔子曰はく、「これを天に受けて、交易すべからぬものは形なり、これを命に受けて、請益すべからぬものは寿なり」といふ。鬼谷先生の相人書に見ゆ。故に知りぬ、生の極めて貴く、命の至りて重しといぬことを。言はむと欲へども言窮まる、何をもちてか言はむ。慮らむと欲へども慮絶ゆ、何によりてか慮らむ。おもひみるに、人、賢愚となく、世、古今となく、ことごとくに嗟嘆す。歲月競ひ流れて、昼夜も思はず、曾子曰はく、「往きて反らぬは年なり」といふ。宣尼が臨川の嘆きもこれなり。老疾相催して、朝夕に侵し動く。一代の懽樂、いまだ席前にも尽きねば、魏文の時賢を惜しむ詩には「いまだ西苑の夜をも尽さねば、にはかに北邙の塵と作る」といふぞ。千年の愁苦、さらに座後に繼ぐ。古詩には「人生百に滿たず、何ぞ千年の憂へを懷かむ」といふぞ。もしそれ群生品類、みな有尽の身をもちて、ともに無窮の命を求めずといふことなし。このゆゑに、道人方士の、自ら丹經を負ひ、名山に入りて薬を合するは、性を養ひ神を怡びしめて、長生を求むるぞ。抱朴子に曰はく、「神農二云はく、『百病愈えず、いかにしてか長生すること得む』

といふ」と。南公なんこうまた曰はく、「生は好き物なり、死は悪しき物なり」といふ。もし不幸にして長生すること得ずは、なほ生涯病患なき者をもちて、福はひ大きなりと為さむか。今し吾れ、病に悩まされ、臥坐すること得ず。かにかくに、為すところを知ることなし。福はひなきことの至りて甚だしき、すべて我れに集まる。「人願へば天従ふ」と。もし実にはあらば、仰ぎて願はくは、たちまちにこの病を除き、さきはひに平のごとくなること得む。鼠をもちて喙へと為す、あに愧ぢずあらめやも。すでに上に見ゆ

まず「沈痾自哀文」について見ていこう。この作品は、『萬葉集』の中でも最大の長編である。本作品は、「我れ何の罪を犯せばか、この重き疾に遭へる」という問いかけから始まる。自分のように規範に背かず生きてきた人が重い病を患うのはどういふことか、これが憶良の問いである。しかし、病の原因を特定することはできない。また、病を取り除くことができる良医もいない。このような現状にあつて、憶良は病の苦しみから逃れることが不可能であるという認識に至る。

重い病、そしてその治癒の不可能性を認識することは、憶良に死を連想させる。憶良の記述は、病の描写から、死の不可避性をめぐる記述へと移っていく。憶良は、ここで生死に対するある認識を示す。それは、「天地の大徳を生といふ。故に死にたる人は生ける鼠にだに及かず」というものである。さらには「生の極めて貴く、命の至りて重しといふことを。言はむと欲

へども言窮まる、何をもちてか言はむ」とも述べる。このように彼は、生の貴き、死者はもはや無価値な存在であることを繰り返し述べる。他にも、「王侯なりといへども、一日氣を絶たば、積める金山のごとくにありとも、誰れか富めりとなさむ、威勢ちから海のごとくにありとも、誰れか貴しとなさむ」と述べ、あるいは『遊仙窟』から「九泉くわんせんの下の人は一錢にだに直せず」という文を引用する。

こうした表現から、憶良が生死に対してどのような見解を持っていたのかを検討しよう。そこで、検討に際してまず注意しなければならぬことは、憶良は生に対しては、きわめて抽象的な一般名詞「生」を用いているのに対し、死については「死」という語を用いて表すのではなく、それは「死にたる人」や「九泉の下の人」というように、死者を表す語を用いているということだ。そこで、それぞれの語の使い方に即して議論していこう。まずここで言われる「生」とは何を意味するのか。生には、その主体が必ず存在する。誰にも営まれない生はあり得ない。また、私たちは生きてある限りは、さまざまなことを経験する。単純な言い方をすれば、善いこともあれば悪いこともある。また人生全体について考えてみても、誰もが賞賛するような人生があれば、思わず目を背けたくなるほど不幸な人生もあるだろう。しかし、当該作品で言われる「生」は、そうした生の具体的側面をすべて切り捨てている。それは、生きてあることそれ自体を意味する。どのような主体によつて、どのように営まれるかに関わらず、それ自体で「生」は善いものとみなされている。

「死」についてはどのようなことが言えるだろうか。既述のように、憶良は「死」という抽象語を用いてはいない。「死にたる人」や「九泉の下の人」という表現が用いられていた。ただし、これらの表現も抽象性の高い語である。というのは、そこで意味されているのは、死者一般のことであるからだ。生についての議論と同様に、死者についても、さまざまな人の死を想定することができるとは、憶良は死者をすべてひとまとまりにして議論している。つまり、死人は皆共通して無価値な存在であるとみなされている。では、死者が無価値であるという認識は、憶良の死生観を探索する上で、どのようなことを帰結するのであるうか。

生きてある限りは、「生」が多大な価値を有するがゆえに、生きてある人もまたそれだけで価値ある存在だと認められる。そして、死ぬことにより無価値な存在に転ぜられる。とするならば、憶良にとって「死」が何を意味していたのかは明らかである。すなわち、彼にとつて「死」とは、「生」の善い価値を奪うものであった。あらゆる善い価値を奪い無化するという点に、「沈痾自哀文」における憶良は、死の本質を見ている。

すでに見てきたように、生はそれ自体で肯定的な価値を有するものであり、死はその価値の一切を奪うものである。そのように憶良は考えていた。そして、このように否定的な意味づけがなされている点に、死を受容しきれない彼の苦悩を見ることが出来る。

続いて「俗道悲嘆詩」を検討してみよう。

俗道の仮合即離し、去りやすく留みかたきことを悲嘆し
ふる詩一首并せて序

ひそかにおもひみるに、釈・慈の示教は、釈氏・慈氏をいふ
すでにして三帰 仏・法・僧に帰依することをいふ 五戒を開
きて、法界を化く、一に不殺生、二に不偷盜、三に不邪淫、四に
不妄語、五に不飲酒をいふ 周・孔の垂訓は、すでにして三綱
君臣・父子・夫婦をいふ 五教を張りて、邦国を濟ふ。父は義
に、母は慈に、兄は友に、弟は順に、子は孝にあることをいふ 故に
知りぬ、引導は二つなれども、得悟はただ一つのみなりと
いふことを。

ただし、世に恒質なし、このゆゑに陵谷も更変す、人に
定期なし、このゆゑに寿夭も同じからず。撃目の間に、百
齡すでに尽く、申臂の頃に、千代もまた空し。且には席上
の主となり、夕には泉下の客となる。白馬走り來るとも、
黄泉には何にか及かむ。隴上の青松は、空しく信劍を懸く、
野中の白楊は、ただに悲風に吹かゆるのみ。ここに知りぬ、
世俗にはもとより隠遁の室なく、原野にはただ長夜の台の
みありといふことを。

先聖すでに去り、後賢も留まらず。もし贖ひて免るべきこ
とあらば、古人誰れか価の金なけむ。独り存へてつひに世
の終を見る者ありといふことを聞かず。このゆゑに、維摩
大士は玉体を方丈に疾ましめ、釈迦能仁は金谷を双樹に掩
したまへり。内教には「黒闇の後より來むことを欲はずは、
徳天の先に至るることなかれ」といふ。徳天は生なり、

黒闇は死なり 故に知りぬ、生るればかならず死ありといふことを。

死をもし欲はずは、生れぬにしかず。いはむや、たとひ始終の恒数を覺るとも、何ぞ存亡の大期を慮らむ。

俗道の変化は撃目のごとく、

人事の経紀は申臂のごとし。

空しく浮雲と大虚を行き、

心力ともに尽きて寄るところなし

本作品は、題詞、序文、詩という構成になっているが、まずは題詞に注目したい。これは「俗世のあり方というものは、仮に合わざつたもので、それはたちまちに離れてしまうもので、消えやすく留めがたいことを嘆き悲しむ歌」という意味である⁽¹⁾。俗世にある存在としての人は、この世にとどまり続けることができない。このことを「悲嘆しぶる」という。

「悲嘆しぶる」という語が用いられるとき、そこには、そうあるべきではないという思いが含蓄されると言えるだろう。ここで憶良が「悲嘆しぶる」のは、端的に言えば、人が生まれれば死ぬということである。死すべき運命にあることを悲嘆するという点に、死を拒む精神性の現われを見ることができ、当該作品の序文にある以下の記述に注意すべきである。

死をもし欲はずは、生れぬにしかず。いはむや、たとひ始終の恒数を覺るとも、何ぞ存亡の大期を慮らむ。

まず、最初の文である「死をもし欲はずは、生れぬにしかず」について考えてみよう。この文は、条件節と帰結節に分けられる。条件節は、死を欲しないならば、という意味であり、それが帰結するものが、生まれてこないことに尽きるというものだ。「沈痾自哀文」との関連で言えば、明らかにこの条件節は、憶良じしんの立場である。すなわち、この文が意味するのは、憶良のように死を欲しない人はどうすればよいのか、という問題についての憶良じしんの考えを集約したものである。その答えが、「生れぬにしかず」である。死は生を前提して初めて存立する概念であり、「生れぬにしかず」ということは、要するに、前提を消去することで、死という問題それ自体を消去してしまうことに他ならない。それ以上の方法はない、というのが憶良の認識である。

続く文は、「ましてやたとえ始まりがあれば終わりがあるという世の定めを悟つたとして、どうしてそれと同じように、生があれば死を逃れることができないう世の定めについて思いめぐらすことができようか」と解釈される⁽²⁾。この世の中にある、ありとあらゆるものは、始まりがあり、必ず終わりがある。同じように私たちの生も、始まり（誕生）があつて終わり（死）がある。理屈で考えれば至極当然のことであるのに、生死の問題になると、どうしてもこの理を受け入れることができない。生まれれば必ず死ぬという不可避の事実をどうしても受け入れられない憶良にとって、死の受容というのは不可能な思

想であつた。詩には、不可能な思想に挑んで敗れた憶良の心情が表現されている。

俗道の変化は撃目のごとく、

人事の經紀は申臂のごとし。

空しく浮雲と大虚を行き、

心力ともに尽きて寄るところなし。

生まれれば必ず死ぬという道理をめぐつてさまざまに考えてきたものの、現実には死から逃れることはできず、だからといって死の訪れを受け入れることもできない。どうすることもできないという無力感が、詩の後半で表現されている。憶良は、死の受容という問題については、明白に自らの敗北を悟つていた。

以上の憶良の思想は、死への抵抗をめぐる思索として考えることができるだろう。そして、その抵抗は敗北に終わらざるをえなかつた。しかし、これまで見てきた限りでは、なぜ憶良は生に対してこれほどまでに価値を見出し、死の受容をことさらに拒むのかが示されていない。たとえば、死の拒絶は、死に対する如何ともしがたい恐怖感から来ると考えることもできよう。しかし、少なくとも残された憶良の作品のうちに、死への恐怖という文言を見出すことはできない。

これまでの議論においては、憶良にとつて死とは生の価値を奪うものである、という規定がなされた。仮に死に対する拒絶が、この価値を奪うという性質に由来するものであると考えた

としても、依然として、なぜ生に至上の価値が存すると考えているのかについては、明らかにならない。そこで注目したいのが「児等を思ふに及る歌」である。序でも述べたように、この歌は自分の死によつて残される者への思いが歌われている。本節で取り上げた二作品とは主題を異にする当該作品の検討を通して、新たな角度から憶良の死生観に迫ることにしよう。

二、残される者への視点

「児等を思ふに及る歌」は、長歌一首と反歌六首の計七首で構成されている。そのうち、長歌は以下の通りである。

老身に病を重ね、経年辛苦し、児等を思ふに及る歌七首
長一首短六首

たまきはる うちの限りは臆
といふ 平らけく 安くもあらむを 事もなく 喪なくも
あらむを 世間の 厭げく幸けく いとのかきて 痛き痛に
は 辛塩を 注ぐちふがごとく ますますも 重き馬荷に
表荷打つと いふことのごと 老いてある 我が身の上
に 病をと 加へてあれば 昼はも 嘆かひ暮らし夜はも
息づき明かし 年長く 病みしわたれば 月重ね憂へさま
よひ ことことは 死ななと思へど 五月蝓なす騒く子ども
もを 打棄てては 死には知らず 見つつあれば心は燃え
ぬ かにかくに 思ひ煩ひ 音のみし泣かゆ (八九七)

反歌

慰むる心はなしに雲隠り鳴き行く鳥の音のみし泣かゆ

(八九八)

すべもなく苦しくあれば出で走り去なと思へど子らに障りぬ

(八九九)

富人の家の子どもを着る身なみ腐し捨つらむ絹綿らはも

(九〇〇)

荒袴の布衣をだに着せかてにかくや嘆かむ為むすべをなみ

(九〇一)

水沫なす微き命も袴繩の千尋にもがと願ひ暮しつ

(九〇二)

しつたまき数にもあらぬ身にはあれど千年にもがと思ほゆるかも

去にし神龜二年に作る。ただし類をもちての故に、さらにここに載す。

(九〇三)

天平五年の六月丙申の朔にして三日戊戌に作る。

平穩無事に過ぎたいと願うものの、現状は重い病に苦しめられてゐる。その苦しみを歌つたあとに、憶良は「死ななと思へど」と言う。これまでに示されてきた憶良の死生観とまるで反対の主張である。前に検討した二作品において、死に対する拒絶感を強く打ち出していた憶良は、ここでは、もはや死んでしまいたいと述べる。

先に提起した問いは、なぜ生に至上の価値を見出すのか、と

いうことであつた。この根拠を明らかにすることで、彼に死生観の全体像が明らかになると考えたからだ。しかし、ここではもはや生にそのような価値を見出す姿勢は見られない。憶良は、これほどまでに苦しい生から逃れて、いつそのこと死んでしまいたいというのである。生に価値を見出す姿勢は無根拠であるどころか、その姿勢それ自身が反転されてしまった⁽³⁾。

しかし「死ななと思へど」は、あくまで逆接表現である。すなわち、死んでしまいたいと思うのだけれども、実際には死ねないのである。すなわち、憶良には生きなければならぬ理由がある。それが「死ななと思へど」に続く表現である。「五月蠅なす 騒く子どもを 打棄てては 死には知らず 見つつあれば 心は燃えぬ」、すなわち、子供をうち捨てて死ぬことはできず、子どもたちを見ていると、心は燃え上がると歌うのである。子どもたちのために生きなければならぬ、という憶良の表現からは、二つの帰結を得ることができる。

一つは、憶良にとって死が何を意味するのか、という点についてである。先に議論した内容としては、彼にとって死とは、生の価値を奪うものである、というものであつた。ここでは、子どもを置いて死ぬことはできない、という表現からも明らかのように、死が意味するのは、愛する人との別れである。

二点目は、生の価値の根拠についてである。これは、一点目の議論から帰結するものである。一点目において確認したのは、憶良における死の意味であつた。死の意味が、「沈痾自哀文」と「児等を思ふに及る歌」において変容したように見えて

しまが、総合的に解釈する方法はないだろうか。そこで考えられるものとしては、後者は前者による死の意味の規定を、より具体化したものと見ることができよう。端的に言えば、死が奪い去る生の価値とは、愛する人（作品に即せば「子ども」）との生活ということになるだろう⁽⁴⁾。それを奪うということは、要するに愛する人との生活を不可能にすることであり、つまりは別れを意味する。

以上をまとめれば、憶良にとつて死とは、愛する人との生活という至上の価値を奪うものであつたといふことができる。しかし、このように整合性を求めて一つの解釈案を提示できたとしても、やはり「沈痾自哀文」や「俗道悲嘆詩」の描写と「児等を思ふに及る歌」との間に大きな断絶があることは否めない。というのも、「児等を思ふに及る歌」において重要な意味をもつた他者への眼差しが、前者の二作品には皆無だからだ。となれば、やはり前者二作品と後者との間で、作者憶良のうちになんらかの思想的変容があつたと見るべきである。では、それはいかなる変容であるだろうか。

三、問いの地平の変容

振り返つてみると、「沈痾自哀文」は生に至上の価値を見出してはいたものの、その根拠を示すことはなかつた。では、生に価値を見出す根拠は何か。この問いの答えを求めて、本稿は議論を進めてきた。先の議論によれば、愛する人との生活によつ

て生の価値が生じると考えた。しかし、「沈痾自哀文」においては他者への視点は欠如していた。すなわち、憶良が「沈痾自哀文」において記していた「生の価値」について、彼が自覚的に愛する人との生活を考へていたと考えることは難しい。では、何が彼に生の価値を認めさせたのか。

そこで考えられるのが、この問いの探求という試み自体が、ある一つの可能性を排除しているということだ。つまり、そもそも生に価値を見出すことに根拠はない、という考えもまた一つの可能性である。憶良にとつて、生は無根拠に善いもので、死は無根拠に悪いものであつたのである。そして、これこそが、執拗に生の価値、死者の無価値性に言及しながら、その根拠を明示していかない憶良思想の解釈としては妥当なものではなからうか。無論、憶良の思想の根拠があつたのか、その「解釈」を探求することはできるだろう。しかし、そうして提示された「解釈」はもはや憶良のものではなく、それを見出した解釈者のものである。憶良じしんが明示的に根拠を提示していない以上、生の善性、死の悪性は、思索の大前提であつたと考えられる。しかし、憶良の生死をめぐる思索は、ここで終わらなかつた。すなわち、「児等を思ふに及る歌」において、それは新たな展開を見せる。まず確認されるべきは、先に指摘したように、「児等を思ふに及る歌」にあつて、「沈痾自哀文」にないものが何か、ということだが、それは他者への眼差しであつた。そして、ここでの他者は、具体的に子どもであつた。それは三人称的な他者ではなく、具体的な二人称的な他者、すなわち自己の生と密

接に関わり合う親密な他者である。これこそ、すなわちこの二人称の視点の導入こそが、憶良の思想的変遷を特徴づけるものである。これは明確に憶良の問いの地平の変容を意味する。

二人称の視点を導入するということは、生や死について考える際に、憶良が自らが営んできた具体的な生の視点に立っているということだ。これと対比させて考えると、「沈痾自哀文」や「俗道悲嘆詩」を特徴付けるものとして、視点の欠如を挙げることができよう。というのは、憶良がそうした作品で生や死を問う場合、そこで問題にされる生や死は誰のものでもなかったからだ。そこで問題にされた生死は、特定の視点から見られた生死ではなく、普遍的な生死であった。もし憶良がこの普遍的な生死について、その受容可能性を見出したとするならば、死の受容という点では、それは究極的な答えであるだろう。すなわち、憶良は死の受容の可能性を追求して、挫折したのだが、それはあくまで、あらゆる人に妥当するような答えを出すことができなかった、というに過ぎない。そして、その不可能性を認識した上で、改めて具体的な自らの生の視点に立つて生死を問題にした。では、その具体的な憶良の視点が、「子ども」への眼差しであったということは、何を意味するのだろうか。それを検討するためには、憶良にとって「子ども」が何を意味するのかを見なければならぬ。

四、「子ども」への愛

憶良において、「子ども」がどんな存在であったのかを端的に示す歌が、以下に示す「子等を思ふ歌」である。

子等を思ふ歌一首并せて序

釈迦如来、金口に正に説きたまはく、「等しく衆生を思ふこと羅睺羅のごとし」と。また、説きたまはく、

「愛は子に過ぎたることなし」と。

至極の大聖すらに、なほ子を愛したまふ心あり。いはむ

や、世間の蒼生、誰れか子を愛せずあらめや。

瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして偲はゆ

いづくより 来りしものぞ まなかひに

もとなかりて 安寐し寝さぬ

（巻五、八〇二）

「反歌
銀も金も玉も何せむにまされる宝子にしかめやも（八〇三）

「反歌に明白に示されているように、憶良は極めて子を愛した人であった。子への特別な愛情を疑問に思う人はいないだろう。だが、仏教においては、我が子への執着という煩惱の発露に他ならない。憶良はそのことを熟知する人でもあった。子への特別な愛を当然視するのであれば、わざわざ釈迦を引き合いに出して、自らの子への愛を正当化する必要などありはしない。

仏典の教えるところに従って、子への愛執を破棄するべきで

ある、とする考えが、憶良には存していたであろう。だが、仏典の教えを遵守しようとする理性的志向は、現実存在する子への愛情に妨げられる。憶良の中で、理性と情が激しくぶつかり合う。結果は歌にあるとおり、情が勝ったのであり、彼は子への愛執の肯定へと歩みを進める。憶良には、子への愛を否定することがどうしてもできなかったものであり、それほどまでに「子ども」という存在は彼にとつて重要なものであった。

さて、生死の問題に話を戻そう。憶良は「沈痾自哀文」「俗道悲嘆詩」において、生死とは何か、死はいかにして受容するかといった問題を、人一般の問題として、すなわち無人称的な形で思索してきた憶良は、決定的な挫折に追い込まれた。そこで彼の思想は、否定的な形ではあれ完結したはずであった。しかしながら、彼は新たに一つの作品を作らずにはいられた。前者二作品は、仏教思想をはじめとして、さまざまな権威のある思想を引用しながら、いわば理性的に生死の問題を扱おうとしたのに対して、「児等を思ふに及る歌」は、憶良じしんの情念がはき出されている。

憶良作品の解釈について、芳賀紀雄⁵⁾は、「無常の理と彼のそれへのあらがい」という統一的な観点を提示している。この観点に従うと、右に示した憶良思想の変遷は、以下のようにまとめることができる。

「子等を思ふ歌」において、理性が認識するものは、子への愛執という煩惱からの脱却であり、それへの離反は、子への特

別な愛情の肯定に他ならない。「児等を思ふに及る歌」において、子への愛という情は、生き続けなければならぬという理性的な要求を生じさせる。そして、その理性的な要求によつて生じる、「生き続けたい」という情が、世間無常の理と対立することとなる。

右のように捉えるならば、「沈痾自哀文」「俗道悲嘆詩」は、ともに憶良の情念が生み出した理性的要求に即して生み出された作品である。それゆえに、憶良は権威的な諸文献に依拠することとなった。しかし、この理性的要求に応えることはできなかった。そして、子への愛という情のみが彼に残され、それが「児等を思ふに及る歌」で歌い上げられることとなったのである。

結

序で示した問いに即すならば、憶良における生とは、二人称的な他者である「子ども」と生きることを意味し、死はその他者との別れを意味した。「子ども」のために生きたいという思いは、死の受容を困難にする。憶良は最後まで長生を願い続ける人であった。では、彼の死生観は、死への抗いのみを意味するものであろうか。そうではなく、憶良の死生観は積極的な主張を持っているとは言えないだろうか。

私たちはみな他者との関係性の網の目の中で生きている。そうした足場に立つて物事を価値づけたり、その意味を見出したる私たちにとつて、他者の存在は決して欠くことのできな

い本質的な生の一部である。本稿の議論から、憶良の死生観は、この厳然たる事実を主張する一個の思想であることが帰結する。特に、生きる目的に二人称的な他者（子ども）を据えたことは、生の有意義性を確認し、生を肯定するための視点を提示するもので、私たちが生死を問う仕方の一つの可能性を与えるものであると言える。

注

(1) 「俗道」について、芳賀紀雄「理と情―憶良の相剋―」（『萬葉集における中國文學の受容』瑞書房、二〇〇三年、所収）は、まず憶良の他の作品における「俗」の用例の検討から、そこに仏教的含意を看取しながらも、中心の意味は「世間」であり、さらに憶良における「道」が「理」として把握されていることを指摘し、ここにある「俗道」は「世間のあり方」であるとしており、本稿はそれに基づいて解釈している。

(2) 「恒数」とは「きまった数。定数。常数」（『諸橋轍次「大漢和辞典」』とある。「始終の恒数」という表現においては、この「定まった」という意味が中心にあると見るべきであろう。芳賀前掲論文が、仏典の用例を参照しつつ主張したように、これは「法則」という意味に解するのが適切と考えられる。また、「存亡の大期」については、村山出『山上憶良の研究』（桜楓社、一九七六）が『日本書紀』において「大期」を「寿命」の意味にとる用例があることを指

摘しつつ、芳賀前掲論文が仏典および『統日本紀』の用例から「期」に「ある法則性による」さだめ」という意味を見出したことを受けて、「生あれば死あるという不可避な運命」と解釈したことに依拠した。

(3) 憶良の作品群全体を見れば、当該歌における憶良の姿勢はもつともなものである。彼が一貫して歌い続けたのは、生に纏綿する苦しみである。老いの苦しみや病の苦しみ、貧困の苦しみがそれである。生を苦しみという側面から歌い上げてきた憶良にとって、そもそも生とは至上の価値を見出しうるようなものではなかったと考えるのが、整合的であるとさえ言えよう。それゆえに、憶良の思想を検討する上では、当該歌は収まりがよく、むしろ先に検討した二作品の方が逸脱している。

(4) ここでの「子ども」が、憶良の子であるのかどうかについては不明であるが、憶良は「子等を思ふ歌」において、子に対する強い愛情を歌い上げている。この点を踏まえれば、「子ども」は憶良にとつてかけがえのない二人称的存在であると言うことができるだろう。なお、具体的に「子ども」が誰であったのかについて、伊藤益「旅の思想―日本思想における「存在」の問題―」（北樹出版、二〇〇一年）は、憶良の幼い孫であった可能性に言及している。憶良の年齢が七十を超えていた点、そして子どもへの愛情を歌う作品が多い点を踏まえるならば、伊藤説が極めて説得的であるとさえ言える。

(5) 芳賀前掲論文。

(こたに・としひろ

筑波大学大学院
人文社会科学研究院)